

E. M. フォースターと「東洋人」

清 水 輝 雄

序 論

E. M. フォースター (E.M. Forster) が彼の最大傑作であり、かつ最後の小説である「インドへの道」(A Passage to India) の中で再三用いている「東洋人」(Oriental) という言葉は普通我々がイギリス人・フランス人等と言うのとは全く異った意味を持っている。彼の言う「東洋人」を簡単に定義するのは非常にむずかしいが、「東洋的な物の考え方、心情をわきまえた人」というような内容のものである。この小説の実質上の主人公と言えるインド人医師アズイズ (Aziz) とイギリス人のムーア夫人 (Mrs Moore) とのモスクの中での最初の出会いでアズイズが

“You are an Oriental.” (「あなたは東洋人です。」)^(注1) と言う時それは深い親愛の情を表わす言葉であると同時に彼としては最高の讃辞を呈したことになり、この老婦人の方でも深い感銘を受けたのである。

このアズイズのモデルと言われるフォースターの親友のインド人シド・ロス・マスード (Syed Ross Masood) がフォースターに宛てて書いた手紙を読めば「東洋人」の持つニュアンスがはっきりするであろう。

“I do not wish to flatter you in any way but the fact is that you are about the only Englishman in whom I have come across true sentiment & that, too, real sentiment even from the oriental point of view. So you know what it is that makes me love you so much, it is the fact that in you I see an oriental with an oriental view of life on most things——.”

(「私はあなたに少しでもへつらうような気持はありませんが、私がか

れまでに本当の感情、それも東洋的見地から見てさえ本当の感情を見出しえたイギリス人はほとんどあなただけだったというのは事実です。こんなにあなたを愛するように私をしむけたものが何であるか、それはあなたという人間の中に大抵の事柄を東洋的な見地で眺める東洋人を見出したという事実に他ならないことはあなたも御存知のことです。』(注²)

この手紙はフォースター自身が典型的な「東洋人」であることをはっきりと示している。

さらにこの「東洋人」という言葉は彼の作品の特質を解明する手がかりとなると共に当時英国にとって重大関心事であったインド人との融和の実現についてフォースターが抱いていた方策を示唆するものと考えられるので次の各章で種種の角度からこれに検討を加えてゆくことにする。

第一章 フォースターの作品の特徴

フォースターの作品を特徴づけているもの——それは同時に彼の性格の特徴でもあるが——は友情の尊重と豊かな想像力 (imagination) の二つにしばられるであろう。そしてこの二つはまた彼の「東洋人」という言葉の概念の主要な要素をなすものでもある。

先ず第一の友情の尊重であるが、彼が作品の中で取り上げている友情は日常生活のふれあいで生じる普通の友情ではなく、各人がはっきりした個性 (individuality) を持つことを前提とし、その上に立った深い心の通じ合った友情である。彼の伝記(注³)を読めば彼が常にこのような友人を捜し求め、しかも彼にとって誠に幸運なことほとんど常にその友人に恵まれていたことが分かる。その友人との間が少しでも疎遠になると彼は激しい苦悩に陥り、如何に彼が友情に依存していたかがよくわかれる。少し極端な表現ではあるが彼の次の言葉に彼の心情がよく表われている。

“—if I had to choose between betraying my country and betraying my friends, I hope I should have the guts to betray my country.”

(「もし私が国家を裏切るか友人を裏切るかの何れかを選ばねばならぬとしたら、私は国家を裏切る勇気を持ちたいと思う。」)(注4)

このフォースターの特徴を簡潔に表現しているのは批評家ブランダー (Laurence Brander) の次の言葉であろう。

In these sixty years of change and shifting values during which he wrote, he has clung to friendship as the only reliable secure thing left—.

(彼が著作に従事した変化と価値観の変動の60年間に彼は残された唯一のたよりになる確かなものとして友情にしがみついてきた。)(注5)

さらにブランダーは

His creed is personal relations—.

(彼の信条は個人的関係〈友情〉である。)(注6)

とさえ言っている。

前にあげたインド人マスードとフォースターの間の友情こそ彼が理想とする友情の典型であり、「インドへの道」の基調となって全編に滲透している。マスードはインドから英国に留学してオクスフォード大学入学準備中にフォースターがラテン語の家庭教師の依頼を受けたことが縁となって友情が芽生え、フランスやイタリー等を一緒に旅行したりして人種の壁を越えて無二の親友となった。マスードの情熱的で心の中をさらけ出した東洋的な友情がフォースターの求めるものとぴったり合致したのである。

フォースターはマスードを通じてインドへの関心、さらには東洋的なもの一般への関心を深め広く文献を読みあさったことが伝記に書かれている。彼が1912年にインドを訪問することになったのも先に帰国していたマスードとの再会の約束を果たすことが一つの目的であり、その時の体験が「インドへの道」の基となったのである。マスードとの出会いがなければこの傑作が生れることはなかったであろうし、彼の才能が集大成される機会も失われたであろう。フォースターがこの小説をマスード自身だけでなく彼等二人の17年にわたる友情に捧げているのも意味深いものがあると感じられる。

次に友情と共に彼の性格を特徴づけ、その作品の特色となっている想像力の豊かさについてであるが、彼は生来感受性 (sensitivity) が非常に鋭く繊細な感覚の持主であったことが伝記に再三記述されている。これが素地となって想像力の豊かな性格が育まれたものと考えられる。伝記の文章を借用すれば

—to a rather special degree, he lived the imaginative life and, whether in company or in solitude, was attending to imaginative impressions.

(特殊と言えるほどまで彼は想像性に富んだ生活をしていて、そして仲間と一緒にいてもひとりでも常に想像的印象に注目していた) (注7)

のである。そしてやがて彼が「小説の諸様相」“Aspects of the Novel”の中で次のように述べている幻想の世界が生れるのである。

There is more in the novel than time or people or logic or any of their derivatives, more than Fate. I mean something that cuts across them like a bar of light.

(小説には時間や人間や理論やそれらから派生したものより以上のもの、運命より以上のものさえ存在している。私が言おうとしているのは

それらのものを横切って通る一条の光のような何物かなのである。(注8)

この何物かが彼の作品に神秘的な、超自然的な幻想の世界を生み出すのである。この特色は既に初期の短編小説の中にも見られる。その中でも「コロナスからの道」“The Road from Colonus”は有名でよく引用される作品であるが、この特色を知るのに最適のものと思われるのでここでも取上げてみよう。

ルーカス (Lucas) 老人は若い時からヘレニズムのとりこになっていたが、やっと念願が達せられて娘達と一緒にあこがれのギリシアを訪れる。現地に来てみると一向に変わりばえのしない平凡な土地なのでがっかりする。しかしコロナスの付近のスズカケの林の中で大木の空洞から泉が流れ出ているのを見て中にはいってみると小さな祭壇があって色々な供物がしてある。そこで彼は一種の靈感に打たれて急に自分が潮流に押し流されているような気分になる。やがて何かショックを受けて我にかえると周囲のすべてのものが新しい意味をもったもののように眼に映った。彼はこれこそ自分がかねて夢想していたギリシアの姿であると感激する。このスズカケの林に「一条の光」が走り、幻想の世界に変わったのである。

フォースターの幻想を求める心情がインドのもつ神秘的な雰囲気に着かれたのは当然だと言える。こうして

India more and more occupied his mind—the place where he would find a new opening for imagination.

(インドがますます彼の心を占めるようになった。——想像力に新しい窓を開く場所として—) (注9)

のである。そしてインドを舞台としてこの特色が最高度に発揮されたのが「インドへの道」の中のマラバー (Marabar) の洞窟と最後のヒンズー教徒の祭典の場面であろう。特にマラバーの洞窟の中で体験する気味悪い共鳴

は何を意味するものか色々論議され、ヒンズー教の虚無観を象徴するものと一般に解釈されているが、解釈がどうあれ何とも言いようのない不気味な神秘的な雰囲気がかもし出されていることは明かで、フォースターの特色が充分に発揮されている場面である。

さてこれまで述べてきた彼の二つの特徴が彼が描いた「東洋人」の主要な要素になっていることは既に前に指摘したが、次章において「インドへの道」に現われる実際の「東洋人」の言動についてその実態を見ることにしよう。

第二章 「東洋人」の心の交流

先ずこの問題の検討に必要な範囲で「インドへの道」の荒筋を紹介しておこう。

インドの英国直轄領チャンドラポア市 (Chandrapore) 駐在の治安判事ロニー・ヒースロップ (Ronny Heaslop) の許にその女友達で彼が求婚していたアデラ・クエステッド (Miss Adela Quested) が英国から来ている。彼女はインドでのロニーの生活の実態を見た上で婚約するかどうか決めたいというのでロニーの母のムーア夫人が彼女を英国から同伴して来たのである。ムーア夫人は偶然同市の市立病院のインド人医師アズイズとめぐり会い、心の暖まる友情が芽生える。シリル・フィールディング (Cyril Fielding) は同市の市立大学の学長を務めるイギリス人であるが、他のイギリス人達と違ってインドの事物に理解を持ち、インド人の社会にとけ込んでいて評判がよい。彼はインド人の生活の実態に触れたいと望むムーア夫人とアデラ嬢をアズイズやその友人達と一緒にティー・パーティーに招待する。これがきっかけとなってフィールディングとアズイズの間に深い友情が生れる。アズイズもこの二人のイギリス婦人を自宅に招待したいと思うが、貧弱な住居でそれもできず、その代りに同市の近郊にあるマラバー洞窟見物のピクニックに招待する。アズイズは経済的にも精神的にも非常な犠牲

を払って同様な計画を立てる。当日フィールドイニングが汽車に乗り遅れるというハプニングがあったが、とに角二人のイギリス婦人を洞窟に案内する。最初の洞窟にはいると真暗闇の中で「ぶろうん」という無気味な反響があってムーア夫人はショックを受け、気分が悪くなって次の洞窟見物には参加しないで岩かげで休んでいる。その間にアズイズとアデラ嬢は案内人と一緒に次の洞窟に向う。これからが問題の場面であるが、洞窟がいくつも並んでいて誰がどの洞窟にはいったのか、中で何が起きたのか書かれていないが突然アデラ嬢が洞窟から慌てて馳け出て来て丁度遅れたフィールドイニングを乗せて来たイギリス婦人の自動車に同乗して帰ってしまう。アズイズ一行が見物を終えて汽車でチャンドラポアに帰着すると駅でアズイズは婦女暴行未遂の容疑で警察に逮捕される。アデラ嬢が洞窟の中でアズイズに乱暴されかけたと訴えたのである。アズイズは必死になって無実を訴え、フィールドイニングもその弁護に尽力するが、遂に裁判にかけられる。これを契機としてアズイズの人徳を慕って日頃対立していた回教徒とヒンズー教徒が団結して立ち上がり、険悪な空気となる。一方イギリス人達もかねてからアズイズが反英的であるとして快く思っていなかったので一斉に彼を非難した。こうした緊迫した雰囲気の中で法廷が開かれたが、審理の最中に証人のアデラ嬢が突然立ち上がり、事件は自分の錯覚から起ったもので事実無根であるとして告訴を取り下げ、事態は一転してアズイズは無罪放免となり、市内はインド人達の歓喜の叫び声で充ち溢れた。その後アデラ嬢はロニーとの婚約を解消して英国に帰り、ロニーをはじめイギリス人官吏達は皆転任となり、アズイズの方でもイギリス人との接触を嫌って藩王国マウ (Mau) の王の侍医となって転居する。ムーア夫人は病気のため裁判が始まる前に帰国の途につき、航海中に死去する。フィールドイニングはインド政庁の視学官となり、休暇で英国に帰った折に故ムーア夫人の娘 (Stella) と結婚する。裁判のすぐ後フィールドイニングがアデラ嬢と結婚するという噂が流れ、アズイズがアデラ嬢に対して賠償請求訴訟を起そうとした時フィールドイニングがそれを止めたことからアズイズがその動機を誤解して二人の仲が冷却してしまう。数年後アズイズが勤めてい

たマウ王国でクリシュナ神 (Krishna) 生誕の祭典が行われる日に視察旅行中のフィールディングがインド訪問中のムーア夫人の息子ラルフ (Ralph) を伴ってこの地を訪れ、アズイズと再会して二人の間の誤解もとけ昔の友情のよりが戻る。しかしやはりアデラ嬢事件の傷跡は深く、以前のような心の通いあった親交はとり戻せない。こうして読者はインド人とイギリス人の融和のむずかしさを改めて思い知らされるのである。

以上が荒筋であるが、この小説に登場する代表的な「東洋人」はインド人医師アズイズとイギリス人のムーア夫人とフィールディングの三人で、前述のようにアズイズとムーア夫人およびアズイズとフィールディングの間に深い友情が芽生え、それがこの小説の展開の原動力となるのである。特に前にも触れたアズイズとムーア夫人のモスクでの出会いは「東洋人」の心情を巧みに描いて読者に忘れ難い感銘を与える劇的な場面である。ムーア夫人は英人クラブで上演された演劇を見に来たが途中で暑さに参ってひとりでクラブから脱け出し、近くの回教のモスクに心を惹かれてその中にはいる。するとその中にアズイズが居合わせて異教徒のムーア夫人をとがめて次の対話が行われる。

“Madam, this is a mosque, you have no right here at all; you should have taken off your shoes, this is a holy place for Moslems.”

(「奥さん、ここは回教のモスクです。あなたの来る処ではありません。あなたは靴をぬいではいらねばならなかったのです。ここは回教徒にとっては神聖な場所なのです。)

“I have taken them off.”

(「靴はぬいできましたよ。)

“Then I ask your pardon.”

(「それはどうも、大変失礼しました。」)

“—If I remove my shoes, I am allowed?”

(「靴をぬいだらはいってもよいのですか。」)

“Of course, but so few ladies take the trouble, especially if thinking no one is there to see.”

(「勿論いいです。でもそんな手間をかける婦人はほとんどいないのです。特に誰も見ている人がいないと思うと」)

“That makes no difference. God is here.”

(「同じことです。神様はちゃんと見ておられるのですから」)

この返事に心を打たれてアズイズはムーア夫人に親しみを感じ、自分の家族のことやイギリス人に対する不満等を次次に訴えるように話し、その後で既に引用した通り夫人に向って、

“Then you are an Oriental.”

(「それではあなたは東洋人です。」)^(注10)

と言うのである。

アズイズはすぐれた医者であるが、決して特別なインド人ではなく大衆の中で生活し、熱心な回教徒でヒンズー教徒に対して偏見を持ち、反英感情も強い極く普通の市民である。一方ムーア夫人は非常に感受性が強い婦人でインドに来て間もないが直感的にインド人の考え方やイギリス人とインド人の対立感情等がある程度把握していたから普通のイギリス人と違っ

て異邦人であるアズイズと直ちに心が通い合ったのである。また彼等の出会いがモスクの神秘的とも言える雰囲気の中であったということが彼等の心を結びつけるのに大きな力となっているのも見逃せない点である。

その後のアズイズの言動を見ればこの出会いで受けた印象が意識した以上に深く彼の心に焼きつけられていたことが分かる。彼がムーア夫人達をマラバー洞窟に案内してゆく際の彼の心境をフォースターは次のように描いている。

These two (Mrs Moore and Fielding) had strange and beautiful effects on him—they were his friends, his for ever, and he theirs for ever;—Their images remained somewhere in his soul up to his dying day, permanent additions.

(ムーア夫人とフィールディングの二人はアズイズに奇妙な美しい影響を及ぼした——彼等は彼の友人であり、彼等は永久に彼のもの、彼も永久に彼等のものであった。……彼等のイメージは彼が死ぬ日まで彼の心のどこかに永久の資産として残っていた。)(注11)

また裁判後アズイズがアデラ嬢に対して損害賠償請求訴訟を起そうとした時フィールディングがアデラ嬢に同情してそれを止めさせることができたのもアズイズがムーア夫人に対して抱いていた敬慕の念に訴えたからであった。

Aziz had this high and fantastic estimate of Mrs Moore. Her death had been a real grief to his warm heart; he wept like a child and ordered his three children to weep also.—Aziz yielded suddenly. He felt it was Mrs Moore's wish that he should spare the woman who was about to marry her son, that it was the only honour he could pay her,—

(アズイズはムーア夫人をこのように法外に高く評価していた。夫人の

死は彼の暖い心には本当に大きな悲しみであった、彼は子供のように泣き、自分の三人の子供にも泣くように言いつけた。……アズイズは突然譲歩した。夫人の息子と結婚することになっている婦人を許してやることは夫人の願う処であり、それが彼が夫人に対して表わしうる唯一の敬意だと感じたからであった。) (注12)

のである。

一方ムーア夫人の方でも馴れない気候のせいで半病人の状態だったが、息子のロニーを始めイギリス人達が団結してアデラ嬢の支持に立ち上がり、インド人達と対立して緊迫した空気の中で敢然とアズイズの無実を主張して彼を弁護する。彼女は

“I will not help you to torture him for what he never did.—”

“I have heard both English and Indians speak well of him, and I felt it isn't the sort of thing he would do.”

(「私はあなた達が彼がしてもいない事について彼を迫害するのを助けはしない。」……

「私は彼がイギリス人にもインド人にも評判がよいと聞いているし、そんな事は決して彼はしないだろうと感じたのです。」) (注13)

と言う。

アデラ嬢が法廷でアズイズに対する告訴を取り下げると言い出したのも彼女が敬愛していたムーア夫人の言葉に動かされた結果なのであった。この深い心のきずなに結ばれたアズイズとムーア夫人とは実際には僅か三回会って言葉を交わしたに過ぎない。そこに読者は「東洋人」が持つ神秘的とも言える心の交流の姿をはっきりと感ずるのである。

次にアズイズとフィールドイングのかかわりを眺めてみよう。フィールドイングは種種の社会的経験を経て40才を過ぎてからインドに渡りチャンドラポア市の市立大学の学長をしている人物で、非常に知性的であると共

に寛容な心の持主で人種的偏見にとらわれずインド人の中にとけ込んでい
る。彼は次のように信じている。

The world, he believed, is a globe of men who are trying to reach one
another and can best do so by the help of good will plus culture and intel-
ligence.

(この世界はお互いに接近しようと努めている人人が住んでいる処で、
善意と教養と知性の力でそれが最もよく達成できるのだと彼は信じてい
た。) (注14)

しかし同市に住むイギリス人の社会特に婦人達の間では彼の考えは受け入
れられず異端者として強い反感を抱かれていた。

フィールディングはフォースターの思想を代弁していると批評家は指摘
しているが、正確には彼はフォースターの半面——理知的で人情に厚い面——
を代表するもので、他の反面——直感的で想像力に富む面——は前述
のようにムーア夫人が代表していると考えべきであろう。フィールディ
ングはムーア夫人の娘ステラと結婚したのだが、夫人の生存中彼と夫人の
間には心の通った友情が芽生えなかったことでも二人の性格の違いが
うかがい知られる。

フィールディングとアズイズの出会いにはムーア夫人とアズイズの場合の
ように劇的なものではなかった。それは彼がムーア夫人とアデラ嬢をアズ
イズ達のインド人と一緒にティー・パーティーに招待した席であった。二人
はお互いに噂は聞いていたが面会したのはこれが初めてであった。その後
アズイズが病気で寝ていた時フィールディングが見舞いに行ったことで彼
が非常に感激して急に友情が深まり、死んだ妻の写真をフィールディング
に見せた。インド人が外国人に妻の写真を見せるのは全く異例のことで
あり、フォースターの文章を引用すれば、

He was astonished, as a traveller who suddenly sees, between the stones of the desert, flowers.

(フィールディングは砂漠の石の間に突然花を見つけた旅人のようにびっくりした。) (注15)

そして兩人の間に次の会話が交わされる。

“You would have allowed me to see her?”

“Why not? I believe in the purdah, but I should have told her you were my brother, and she would have seen you.”

(「くもし彼女が生きている時だったら」君は私が彼女に会うのを許した
だろうか」「何故許さないことがあるか、私は婦人を隔離する制度を
守っているが、君は私の兄弟だと彼女に言い、彼女も君に会っただろう
と思う。」) (注16)

こうして彼等の友情のきずなが固められたのである。

アデラ嬢の事件が起きるとフィールディングはアズイズの無実を信じ、英人クラブでも彼の弁護をして非難され脱会してしまう。彼はインド人の信望をあつめるが、事件解決後前述の通り彼とアデラ嬢の結婚の噂が立っている中でアズイズが彼女に対して賠償請求訴訟を起そうとするのをフィールディングが止めさせようとしたことから兩人の間に透き間が生じ、疎遠になっていった。数年後アズイズが移り住んでいた藩王国マウでヒンズー教の祭典が行われる日にフィールディングがこの地を訪れて誤解がとけたが、ムーア夫人の娘ではあるが、治安判事のロニーの妹であるステラと結婚したことで兩人の友情にはわだかまりが残り、昔の姿には戻らない。アズイズは叫ぶ、

“—If I don't make you go, Ahmed will, Karim will, if it's fifty five-

hundred years we shall get rid of you, yes, we shall drive every blasted Englishman into the sea, and then"—“and then,” he concluded, half kissing him, “you and I shall be friends.”

（「私が君達イギリス人を追払うことができなければ息子のアーメドやカリムがそうするだろう。何年かかっても我我は君達を追払ってやる。そうだ、イギリス人をひとり残らず海にたたき込んでやる。」……「そしてその時こそ君と私とが友人になれるのだ。」とほとんどキスせんばかりにして言葉を結んだ。）(注17)

これは全く救いのない憎悪の叫びのように聞えるが、アズイズの心の中には抑え難い熱い友情の焰が燃えつつづけていることが読者の胸にはっきりと伝わって来て、将来への明るい希望が残るのである。

第三章 「アングロ・インディアン」達の言動

前章の「東洋人」と全く対照的な存在が「アングロ・インディアン」達 (Anglo-Indians) である。フォースターが用いているこの「アングロ・インディアン」という言葉も東洋人の場合と同じく単にインド在住のイギリス人という普通の意味ではなく、ある共通した特徴をもつイギリス人の名称となっている。彼等は本国のイギリス人とは異質の人間と言える程強い優越感と人種的偏見をもつ特権階級である。そして彼等の言動は「東洋人」の姿を浮き出させる背景の役割を果しているから「東洋人」の本質を明かにする手だてとしてここで彼等に眼を向けてみることにする。

これまで便宜上イギリス人と呼んで来た人達もムーア夫人とフィールドイングを除いてすべてこの「アングロ・インディアン」であり、彼等の考え方をよく表わしているのは治安判事のロニイの次の言葉であろう。

“I am out here to work, mind, to hold this wretched country by force. We aren't pleasant in India, and we don't intend to be pleasant. We've something more important to do.”

(「私は仕事をするために、このみじめな国を強権で保持するためにここに来ているのだということをおぼえておいて下さい。……私達はインドでは愛想よくなれないし、愛想よくふるまおうとも思っていません。私達はもっと重要な役目があるのです。)」(注18)

これに反論して母親のムーア夫人は言う。

“The English are out here to be pleasant.”—

“And God has put us on the earth in order to be pleasant to each other.—”

(「イギリス人は愛想よくふるまうためにここに来ているのです。」……「そして神様はお互いに愛想よく接するために私達を地上に送られたのです。)」(注19)

この会話から二人の考え方の違いが明白にうかがわれる。ロニーのようにインドに来て比較的年数の少ない若い官吏達は自らインド人の守護者 (guardian) をもって任じ職務にはげんでいるが、彼等もフィールドイングのように進んでインドの民衆の中にとけ込んでその心に触れようとしなから感謝されるどころか反感を抱かれている。インド在留の長い年長者達になると優越感と人種的偏見をつのらせてインド人を敵視するようになっている。地方長官のタートン (Turton) がフィールドイングの行動を非難した次の言葉がこのような官吏の心情をよく表わしている。

“—I have never known anything but disaster result when English people and Indians attempt to be intimate socially. Intercourse, yes.

Courtesy by all means. Intimacy—never, never.—”

（「イギリス人とインド人が親しく交際するようになると今までにろくなことはなかった。ただの交際ならよい、それもできるだけ儀礼的に。だが親密になることは絶対にいけない。」）（注20）

しかし男達の態度にはまだ何等かの使命感、正義感が感じられるが、彼等の夫人達は彼等以上にごう慢で人種差別意識が強い。彼等だけの別天地である英人クラブ内での会話にそれがはっきり表われている。タートン夫人はムーア夫人に助言して

“Don't forget that. You're superior to everyone in India except one or two of the Ranis, and they're on the equality.”

（「それを忘れないで。あなたは二三の王妃を除いてインドの誰よりもえらいのです。その王妃だってあなたと対等なのですよ。」）（注21）

と言い、さらにキャレンダー軍医 (Callendar) の夫人に至っては

“Why, the kindest thing one can do to a native is to let him die.”

（「ほんとにインド人にしてやれる一番親切な処置は彼を死なせてやることですよ。」）（注22）

と言っのける。アデラ嬢事件で昂奮していた時のことではあるが、タートン夫人は

“You're weak, weak, weak. Why, they ought to crawl from here to the caves on their hands and knees whenever an Englishwoman's in sight,—”

〔あなた達男は本当に弱腰だ。イギリス婦人の姿が見える時はいつでもインド人達はここから洞窟までの間では四つばいになって歩かせるべきだ。〕(注23)

とさえ言い、さすがに夫のタートンも

“After all, it's our women who make everything more difficult out here,”—

〔結局ここですべての問題を困難にするのは婦人達だ。〕……(注24)

となげく。

このような状況の下ではイギリス人とインド人の融和の実現は至難のわざであろう。アデラ嬢事件後州の副総督が実情視察に訪れた。彼は比較的進歩的な見解の持ち主でイギリス人官僚の人種的偏見を非難しフィールディングの行為を賞讃する。そしてイギリス人官吏達はほとんど更迭されたが、それは単に表面的な変化に過ぎず、人は替っても考え方は旧態依然で、フォースターの表現によれば

British officialism remained, as all-pervading and as unpleasant as the sun,—

(英国の官僚主義が依然として残り、太陽の光線と同じ位広く浸透し、同じ位不愉快であった)(注25)

のである。

この官僚主義が生れた原因としてフォースターは当時の英国のパブリック・スクール制度をあげている。個性を何よりも尊重した彼はパブリック・スクールの全寮制による集団生活は個性の発達を阻害するものとして強く反対して次のように言っている。

They go forth into it(the world) with well-developed bodies, fairly developed minds, and undeveloped hearts. And it is this undeveloped heart that is largely responsible for the difficulties of Englishmen abroad.

(彼等〈学生達〉はよく発達した体とかなり発達した知性と未発達の情意をもって社会に出て行く。そしてイギリス人が海外で出会う困難の大半はこの未発達の情意のせいなのである。) (注26)

この言葉とインド人の批評家G. N. ラオ (G.N. Rao) の次の批判を併せ考えるとイギリス人官僚の欠陥と彼等と「東洋人」の考え方の対照が明白になるであろう。

Wonderful as their qualities may appear to many, they are practically useless in dealing with the Indians whose logic is predominantly the logic of emotion.

(彼等の能力はすばらしいもののように多くの人の眼に映るが、インド人との折衝となるとそれはほとんど役に立たない。というのはインド人の論理は主として情緒の論理だからである。) (注27)

イギリス人官吏の特殊な立場も官僚主義が生れるもう一つの原因と考えられる。彼等は立身出世の夢を抱いてインドに渡るが、現実はきびしくその夢は仲仲実現しない。その上彼等はインドではインド人と遊離した存在であり、老後退職して本国に帰っても別種の人間のように仲間外れにされて淋しく暮らす孤独感から強権の行使にはけ口を見出そうとするのである。

処で上述のような「アングロ・インディアン」達の言動は非常に誇張されており、ガンジーの反英運動後のインドの実状に全く触れていない時代錯誤の記述であるという非難の声があがり、特に退職インド官僚から強い抗議が寄せられたことが伝記に記載されている。確かにこの小説の基とな

った最初のインド訪問当時（1912年）のインドとこの小説が発行された時（1924年）のインドとの間には大きな変化があったことはフォースター自身がエブリマンズ・ライブラリー版のこの小説に寄せた序文で認めている通りである。しかし前述の通りこの小説の中でもアデラ嬢事件を経てもイギリス人官僚の考え方は本質的に変らなかつたことが指摘されているが、現実のインドの情勢においても第二次大戦を経てインドが独立を獲得するまでイギリス人官僚が酷暑のインドで「太陽と同じ位不愉快な」存在であったことは容易に想像される処である。

結 論

「インドへの道」という題名は文字通り解釈すればイギリス国民にインドを理解する手がかりを提供する意味になるが、フォースターの真意はそれだけでなく人種的偏見を乗り越えて両国民の心の融和の道を示すことにあったものと考えられる。

前章で述べたイギリス人官僚の言動から見限りではその融和は百年河清を待つ感があるが、彼等が反省して進んでインド民衆の中にはいってその心に触れればその実現も不可態ではないことを読者は感じ取るであろう。フォースターはその具体例としてムーア夫人とフィールディングを提供したのである。彼はこのような「東洋人」の心情をわきまえたイギリス人の出現に希望をつないでおり、彼の気持はフィールディングがアデラ嬢に忠告する次の言葉によく表われている。

“The first time I saw you, you were wanting to see India, not Indians, and it occurred to me: Ah, that won't take us far. Indians know whether they are liked or not...they cannot be fooled here. Justice never satisfies them, and that is why the British Empire rests on sand.”

（「私が初めてあなたに会った時あなたはインド人でなくインドを見た

いと望んでいた。ああ、これでは駄目だと私は思った。インド人達は自分達が好かれているか否かを知っている。彼等にはこの点ではごまかしは通用しない。正義だけでは彼等を満足させることはできないのです。そしてそれが大英帝国が砂上の楼閣である理由です。』(注28)

この小説の最後の場面でフィールドディングは今後再びアズイズに会う機会はないだろうと思って二人だけで最後の乗馬を楽しみながらアズイズに向って言う。

“Why can't we be friends now?”—“It's what I want. It's what you want.”

(「何故我我は友人になれないのだろう。私も君もそれを望んでいるというのに」)(注29)

二人の乗馬はそれを望まないかのように離れてしまう。さらにフォースターは

—: they didn't want it, they said in their hundred voices, “No, not yet,” and the sky said, “No, not there.”

(……それら〈目にはいる地上のすべての風物〉もそれを望んでいなかった。それぞれの声で「いや、まだいけない」と言い、大空までが「いや、まだ駄目だ」と言っていた。)(注30)

という言葉でこの小説を結んでいる。一見極めて悲観的な結末のように見えるが、通読した読者にはこの二人の「東洋人」の心は決して離れることのない強いきずなで結ばれていることが分かっていて、むしろ明るい楽観的な前途が期待される。

さらにこの小説にはこの心のきずなによってインドだけでなく、広く東

洋全体、さらには全世界の人類の融和が実現するようにとのフォースターの願いが秘められていると推察される。フォースターのすぐれた批評家であるL.トリリング(L.Trilling)もこの点に触れて次のように言っている。

Great as the problem of India is, Forster's book is not about India alone; it is about all of human life.

(インドの問題は大きいが、フォースターの本はインドだけでなく、全人類にかかわるものである。)(注31)

このような視野に立って今日の不安な世界情勢を考え併わせると「インドへの道」は今日でも全世界の人人にとって大きな存在意義をもつ示唆に富んだ作品と言えるのである。

(注)

(A Passage to India は API } と略記する)
E.M. Forster: A Life は Life }

- (1) API chapter 2.
- (2) Life Book I p. 194.
- (3) E.M. Forster: A Life (P.N. Furbank)
- (4) Life Book II p.224.
- (5) E.M. Forster: A Critical Study (Laurence Brander) p.12.
- (6) ibid. p.13.
- (7) Life Book II p.297.
- (8) Aspects of the Novel (E.M. Forster) chap. 6 p.112.
- (9) Life Book I p.184.
- (10) API chap.2.
- (11) ibid. chap.14.
- (12) ibid. chap. 29.
- (13) ibid. chap. 22.
- (14) ibid. chap. 7
- (15) ibid. chap.11.
- (16) ibid.
- (17) ibid. chap. 37.
- (18) ibid. chap. 5.
- (19) ibid.

- (20) *ibid.* chap. 17.
 (21) *ibid.* chap. 5.
 (22) *ibid.* chap. 3.
 (23) *ibid.* chap. 24.
 (24) *ibid.*
 (25) *ibid.* chap. 29.
 (26) Abinger Harvest (E.M. Forster) p.15.
 (27) Focus On Forster's "A Passage to India" (Edited by V.A. Shahane) p.24.
 (28) API chap. 29.
 (29) *ibid.* chap. 37.
 (30) *ibid.*
 (31) E.M. Forster (Lionel Trilling) p.138.

参照文献リスト

(書名)	(著者)	(発行年)
(1) E.M. Forster	Lionel Trilling	1944
(2) The Novels of E.M. Forster	James McConkey	1957
(3) E.M. Forster: A Critical Study	Laurence Brander	1968
(4) Forster's Women: Eternal Differences	Bonnie B. Finkelstein	1972
(5) E.M. Forster: the personal voice	John Colmer	1975
(6) Focus On Forster's "A Passage to India"	V.A. Shahane編	1975
(7) E.M. Forster's India	D.K. Das	1977
(8) E.M. Forster: A Life	P.N. Furbank	1977
(9) E.M. フォースター (イギリス文学作品論第11巻) (備考)	長崎勇一著訳 (英潮社発行)	1980

本論文の固有名詞の発音、役職名の訳語はすべて本書によった。